

# 文章題テスト・説明／論説(2)

日 月 名 前

★ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

二十年ほど前になろうか、わたしはテレビでこう言った。「動物と仲よく付き合うには目線を同じにしてやるのが大切です。」

するとしばらくしてこう言われた。「あなたがテレビで言ったこと、本当ですね。近くにおっかない犬がいますね、近づくとどうなるのです。しかし、目の高さを同じにして、よしよしと接近したら、すぐさまあまえてくれました。」

目線という表現が適切ではなかったのだろうが、物理的に目の高さを同じにすると誤解されたのには苦笑してしまった。

立って上から見下ろすよりも、しゃがんだ方がいづらかコウカはあるだろう。

わたしが言ったのは、精神のレベルを同じにするという意味だった。物理的に目の高さを同じにしなければ仲よくなれないのなら、ゾウやキリンと付き合う時には、ふみ台がいるではないか。イタチと付き合う際には、ね転んで顔を地面にくっつけねばならない。

実際には、そのようなめんどうなことは必要ではないのだ。分かりやすく言えば、半ばゾウになり切るというココロガマエを持っていけば、ゾウと親友になれるのである。

この五年ほど、わが家には都会から少年や少女がやってくるようになったが、特に動物好きだと親が言う少女は、大きな犬などを見ると走り寄って抱き「カーワイイ」とうっとりする。静かに頭をなでる。それだけだ。カーワイイというタイドは何日たっても変わらない。ここに問題がある。

カーワイイというのは、愛情が上から下に流れているだけである。大きさに言うなら、少女の命と犬の命が対等に向き合っていないのだ。犬と同じ平面で生きていけば、「あんた何よ」とこづくかもしれない。何よりも、やさしく頭をなでているだけではなく、走って遊ぶはずである。組みふせられて泣くはめになるかもしれない。しかし、それこそが、命あるものとの大切なやり取りなのだ。

(畑 正憲「ムツゴロウの動物交際術」による)



